

FLYING DEAD EYE

アルード・レナウス

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

スカイ・クロラとか荒野のコトブキ飛行隊とか見てたら書きたくなったので書きました。(軍事に関する知識はwikiで齧った程度)

数多もの平行世界の中に、ウエダン帝国という国があった。

過去にあった戦争を経て、帝国は再び嘗ての敵と戦うこととなった。

その帝国空軍に所属していた『デッドアイ』の2つ名を持つレオーネン・ケリースというエースパイロットは再び操縦桿を握り、戦場の空を飛び立つ。

だが何故、敵はこのタイミングで戦争を吹っ掛けて来たのか、何故そこまでして帝国を滅ぼさんとするのか。

レオーネンは一機の戦闘機と共に真実を知る……。

目次

BEGINNING OF DEAD EYE	1
キリングタイム	4
偽りの闘志	9

# BEGINNING OF DEAD EYE

《1948年 8月 3日》

我らは戦う、戦い死ぬのだ。

偉大なる祖国の為に、家族の為に、戦友の為に、若しくは歪んだ己の欲望を満たす為に。

我らは戦い、死ぬ運命にある。

|||||

||

ラジオから流れた一つのニュースが我が国、ウエダン帝国を混乱に陥れた。

〈臨時ニュースを申し上げます、臨時ニュースを申し上げます。先日、我が国ウエダン帝国はアラード共和国、レドールン王国、リグスタッド公国、ギーベル連邦、ライダル合衆国と再び交戦状態に入れり〉キヤスターが淡々と告げたそれは、ウエダン帝国に世界の主要国の半数が敵に回った事を知らせる内容だった。

《1948年 8月 15日 帝国の西方の街、メリエ》

メリエ、それはウエダン帝国の西方に位置する言わずと知れた大きな商業都市であり、多くの商店が建ち並んでいる。

元々ウエダン帝国というのは多民族、多文化共生を掲げており、ウエダン人もいれば敵国として対立しているライダル合衆国の人間もいる。

様々な国の文化を積極的に取り入れた帝国は今となつてはありとあらゆる民族と文化が入り交じった国となった。

その多民族、多文化は勿論、メリエも例外では無い。

ライダル合衆国の名物であるハンバーガーを売っている飲食店の中に一人ハンバーガーを頬張る男がいた。

「うまつ」

ハンバーガーを舌に触れさせては「うまつ」と呟き、時々砂糖多めのコーヒートを啜る。

バンズに挟まれたハンバーグとベーコンの肉汁のジューシーさ、レ





## キリングタイム

《1948年 8月 23日 ウェダン帝国の西端の国境付近にて》

青い空、白い雲。

白と青だけで構成された美しき空。

風が吹けば雲が蠢き、時々鳥が雲の下を飛んでいる。

そんな本来ならば無音であるべき空の上でけたたましいレシプロ

エンジンの稼働音と20ミリの銃声が鳴り響いていた。

『ライダル空軍機複数確認！ブレイク！ブレイク！』

『戦闘機の機種はMD-124と断定！』

『全機戦闘開始！スケアクロウ2！私に着いてこい！』

無線機から聴こえる勇ましい女の声に『了解』と短く返し、第28戦隊の隊長、リシル・エーリヤの後ろに着く。

現在、我が部隊は国境の対空電探が捉えた敵機の迎撃に向かっていたが、太陽の光に身を隠していたライダル空軍機の部隊に側面から奇襲を受け、2機1組で散開している。

我が部隊が使用している戦闘機はVe-147『ハルスト』

耐弾性を重視しつつ、機体重量を極限まで減らし、そこに2500馬力の空冷エンジンを積んだこの戦闘機は鈍重そうに見えてかなり軽快に動くのだ。

この機体は別の平行世界で運用されていた零式艦上戦闘機にも匹敵する運動性能と他国の新鋭戦闘機に劣らない速度性能を実現した。

しかも、大馬力エンジンのお陰で多少性能は落ちるが追加で様々な武装を取り付けることも可能だ。

今我々が装備しているのは200発装填の20ミリの機銃が翼内に一丁ずつ、機首には250発装填の15ミリの機銃が2丁取り付けられている。

ハルストの通常の装備だ。

リシルの後を追いながら戦況を確認する。

数的にはこちらが優勢、しかし練度では負けている。

先程からMD-124に後ろに着かれた僚機が回避機動を行いな

がら必死に逃げている。

僚機を追うMD―124『ランディア』の後ろにバディなのだろう、もう一機のハルストが着いていた。

しかし、狙いが下手なのか相手が上手く躲しているのか、機首と翼内の機銃から放たれた曳光弾はランディアに掠りもしない。

『後ろに着かれた!!助けてくれ!!』

追われている僚機から悲鳴にも近い助けを求める声が聴こえてくる。

それを確認したりシルはレオーネンを後ろに着かせたまま僚機を助けに向かった。

相手の死角に滑り込むように緩降下し、ランディアの下後方に着く。

『スケアクロウ4!左旋回で回避』

『り、了解!』

新米の乗っていたハルストが左に急旋回し、ランディアもそれを追って左に旋回した。

相手の死角に入れた時点でもう勝負は決まっていた。

リシルの光学照準器の中心には一機のランディアが捉えられている。

後はもう引き金を引くだけ、ただそれだけの事だ。

『墜ちろ!』

重々しい銃声と共に金属が弾けるような音がし、ランディアが一瞬にして蜂の巣と化し、真っ赤に燃え盛りながら墜ちていった。

パイロットが出てこない様子を見ると、どうやらパイロットは死んだか出血性ショックで意識を失ったのだろう。

『スケアクロウ4、無事か?』

『だ、大丈夫です!レオーネン大尉殿!』

潔い返事に少しホツとすると他の編隊のハルストもランディアと格闘戦に移行している。

銃弾が飛び交う空で格闘戦をする戦闘機達はまるで曲技飛行……一種の芸術とも取れる。



しかしその光景に見とれている暇などある筈もなくリシルとレオーネンは2機のランディアの攻撃を受けた。

レオーネンは急旋回で難なく躲したがリシルの機体の右主翼に被弾したらしく、燃料が開いた風穴から噴き出しており、しかもエルロクが吹き飛んでいた。

『やられたっ！』

『リシル少佐！脱出を！』

コントロールを失ったハルストから言われるまでもないと言うように開かれたキャノピーからリシルが飛び降り、パラシュートを展開した。

リシルの無事を確認すると、辺りを見渡した。

空では仲間達が2機1組でランディアの群れと奮闘している。

『ここからは一人で戦うのか……』

前線から長期間離れていたので腕が落ちている可能性もあつて僅かながら不安があつたが考える暇もなく操縦桿を握り直すと単機で敵に攻撃を仕掛けた。

操縦桿の引き金を引き、真下からランディアに偏差射撃を行う。

……命中、敵機の炎上を確認。

次の目標。

急上昇によつて失われた速度を緩降下で稼ぎ、右旋回で下にいる仲間を追っているランディアに狙いを定める。

ここなら狙える……。

ほんの一瞬だけ引き金を引き、数発の銃弾がランディアに向かって発射される。

狙った場所はコックピット。

銃弾は見事にコックピット内のパイロットに命中し、コックピットのキャノピーが血と飛び散った内臓で赤く染まるのがハッキリと見えた。

次……。

その後、直ぐに別のランディアの後ろに着き、華麗なドッグファイトを繰り広げているとレオーネンは自分の後ろにもう一機のラン

ディアが着いていた。

ランディアの射撃を優れた反射神経でバレルロールを行い、回避した。

ランディアから放たれる12.7ミリの嵐をひらひらと躲しながら振り切ろうとエンジンの出力を最大まで上げる。

何時からだろうか、レオーネンは今まで忘れていた感情が溢れんばかりに自らの脳を満たしていた。

それは快感、それは高揚。

嘗ての戦場で抱いていた感情が一気に込み上げてきたのだ。

滾る、己の血が滾る。

敵機を撃ち、敵機に撃たれ、戦場を楽しむ。

そんな彼の”本性”が今、解き放たれようとしていた。

墜とす、墜とされる。殺す、殺される。

突然目を見開いたレオーネンは操縦桿を強く握り、急上昇し始めた。

その目には嘗てない闘志が籠っており、口角が上がっていた。

彼は楽しんでいる、戦いを殺し合いを。

何故ならそれが彼、「デッドアイ」の本性であるからだ。

「かかって来やがれ……墜とし……いや、殺してやる!!」

酸素マスクの裏で狂気に満ちた笑顔で顔を歪ませたレオーネンは失速を起こすまでと言わんばかりに上昇を続ける。

ランディアも負けじとそれに着いてくる。

行動が急激に上がり、それに対して速度も凄まじい勢いで失われしていく。

「どうした!!もつと着いて来やがれ!!」

後ろにいるランディアに向かって届くはずのない笑いの混じった怒鳴り声を上げて上昇を続けていると、突然真上に向かっていったハルストが背面を晒しながら真横を向いたのだ。

『まさか!!』

それを見ていたランディアのパイロットはただその美しき姿に瞳目するしかなかった。

速度を失い、背面を晒したまま降下していくのを確認すると、ハルストの射線とランディアが交わるコンマ数秒前に引き金を引いた。

無防備な背面を晒していたランディアはあっという間に銃弾を浴びせられ、左主翼をもぎ取られたランディアが炎に包まれながら墜ちていくのが見える。

『……敵編隊の殲滅を確認、基地に帰投するぞ』

急降下から復帰したレオーネンはリシル少佐に代わって仲間を率いて基地へと帰投したのだった。

## 偽りの闘志

《1948年 8月29日 第28戦隊飛行場にて》

ブリーフィングルームでは隊長のリシル少佐が作戦の説明を行っていた。

「我々は制空権の維持をする為に南西のリベラット島にあるライダル空軍の飛行場を強襲する」

リシルが地図に指を指した先にあるのはウエダン帝国より南西の方角の沖にあるリベラット島という小さな島だった。

ライダル合衆国空軍はウエダン帝国とは海に阻まれているので間にある島を経由して戦闘機や爆撃機を送り出しているのだ。

「リベラット島の強襲で我々は爆撃隊の護衛を任されている。諸君、勝利への一歩だ。必ず生還して見せろ」

この言葉に全てのパイロットが深く頷いた。  
「良いだろう、各自戦闘機に搭乗しろ」

我々は必ず勝利する。

そう信じて彼らは戦場へと赴く。

彼らは愛国者であり戦士だからだ。

||

飛行場の滑走路に並んだハルストは既にエンジンが始動しており、スロットルレバーを引けば何時でも離陸できる。

レオーネンは深呼吸をしてピカピカに磨かれたゴーグルを装着するとキャノピー越しに周囲を見渡した。

古参のパイロットもいるが、殆どがああ時の迎撃戦が初めてだった新米パイロットである。

各々が恐怖や不安を押し殺しながら出撃の刻を待っている。

爆撃隊の出撃を待っている中、レオーネンはふと昔の事を思い出した。

そういえば、俺が昔いた部隊も隊長が女だったな……………。

彼女とは戦場での思い出しかないが、自分よりも強く、賢く、何よ



全ての編隊がブレイクし、迎撃隊に攻撃を仕掛ける。

一機のランディアをヘッドオンに持ち込み、相手が撃ってくる前に此方が20ミリと15ミリのシャワーを浴びせてやる。

少し距離が遠かったが何とか機首に命中し、大破炎上した。

操縦桿を左に倒してロールを行い、撃墜したランディアの残骸を回避すると今度は右に急旋回し、別のランディアの後ろに着く。

機体の設計上、後方の視界が最悪な程に悪いランディアは後ろに着かれても気付きにくいのだ。

その為、ランディアは帝国空軍と同じように2機1組で戦う。

レオーネンが狙っていたランディアも味方からの無線で気付いたのか、照準を合わせる前に左下に急旋回する。

だが、この時そのランディアは運動性能において全てのライダル空軍機を凌駕しているハルストに愚かにも格闘戦を挑んだ。

結果、勝てるはずもなく逆転出来ずに左に旋回中にコックピットを蜂の巣にされ、パイロットは息絶えた。

『更に迎撃機を…8機確認！同じく1時の方向！』

「敵も用意周到だな……」

遠くを見ると、確かに複数の戦闘機が此方に向かって来ているのが見えた。

戦力差は此方が優勢……と言いたい所だが、この戦隊のほとんどを占める新米パイロットが既に疲弊している。

恐らく、無茶な機動でもして身体にGを掛けすぎたのだろう。

しかし今引く訳にもいかない。

我々は爆撃隊の護衛を任されているのだ。

何としてもこれを成功させなければならぬ。

『休む暇は無いぞ。』

無線でそう言うのと機首を翻し、此方に向かってくるランディアの編隊を視界に捉えた。

『来るぞー！』

ほんの僅かな時間、数秒という一瞬で互いの機体が交差し、どちらかが被弾したのか機首や主翼から燃料や煙が噴き出ているのが見え

た。

レオーネンも一機のランディアを撃墜し、高速旋回で切り返すと事態は悪化しかけていた。

疲弊した新米達はGに耐えられず、水平飛行をしてはランディアの射撃に晒された。

そして、自分の僚機を見やると真下からランディアが向かって来るのが見えた為、無線で僚機に怒鳴る。

『スケアクロウ3!!真下だ!回避しろ!』

レオーネンは警告はした、だが僚機の反応が遅かった。

真下から突き上げてきたランディアは6門の12.7ミリの機銃で僚機を蜂の巣にした。

僚機は真下からコックピットを確実に撃ち抜かれており、僚機だった新米パイロットはキャノピー越しに息絶えていた。

『クソっ!』

——今度は自分が狙われる。

そう察した頃にはランディアは既にレオーネンの後ろに着いていた。

後ろに着いてきたランディアは火力にものを言わせて弾幕を張ってくる。

それをバレルロールで躲し、少しでも速度を稼ごうと急降下をする。

機体が大きく揺れ、速度計の針は時速698kmを指していた。

空中分解するギリギリの所まで急降下を続け、限界まで到達したその瞬間、操縦桿を両手で握り締めて思い切り引き起こした。

ブロペラが凄まじい風切り音を立てながら海面スレスレで機体を水平にもどしたレオーネンだったが、ランディアはそれでも尚、後ろにいた。

しかし、それは全てレオーネンの想定内であった。

レオーネンの後ろに着いていたランディアのパイロットはその一瞬の出来事に啞然としていた。

敵機の機首が突然真上を向いたと思えば急減速した敵機を自分が追い越してしまったのだ。

ここで、ランディアのパイロットは判断ミスを犯す。

あそこまで急減速したハルストならば、高速戦闘機の名を持つランディアの速度性能を活かして距離を離せば良かった筈が、焦って冷静な判断が出来なかったせい、右に急旋回してしまう。

それが間違いだと気付いた頃には既に手遅れ。

オーバーシユートを引き起こさせたハルストは機体を水平に戻すとこれ以上距離を離される前に有難いことに右に急旋回してくれたランディアに狙いを定め、引き金を引いた。

『うわああああああああああアア!!!』

ランディアのパイロットは断末魔を発しながら燃え盛る自分の愛機と共に海面に激突し、大きな水柱が上がった。

『こちらメルリス1、爆撃ポイントに到着、爆撃を開始する』

迎撃機が殺られ、残す対抗手段が対空砲しかなかった飛行場は、為す術もなく爆撃の餌食となる。

飛行場は窪みだらけとなり、滑走路にて離陸しようとしていた戦闘機は全て木っ端微塵に吹き飛んでいた。

それだけでなく、格納庫や司令部にまで爆弾は命中しており、先程まで兵士や参謀達であったのであろう飛び散った四肢や肉片が火の海と化した飛行場に撒き散らされている。

『ヴツ……………』

『スケアクロウ4、吐くなよ』

1人の新米パイロットがその光景を目の当たりにすると、吐き気を覚えて思わず口を抑えた。

リシル少佐も、新米だった頃はこのような感じだったのだろうか。

やはり……”戦争は人を変えてしまう”と言うのは本当らしい。

ふとレオーネンは自分の手を見ると、その手はプルプルと小刻みに揺れており、酸素マスクを外して口に手を当てると口角が上がっていた。

「ああクソ、またこれか……」



